

「障害者への偏見と差別」

舞鶴市立青葉中学校 3年 矢野 朱莉

私の家族には、かっちゃんという障害者がいる。私の父の兄、すなわち私にとっての伯父は、重度の精神障害者だ。小学生の頃の私は、あまり話したことがないかっちゃんのことを、少し怖いと思っていた。そんなある日、いつものように祖母の家に遊びに行った時、一つの出来事が起こった。私が椅子の上に乗って、棚の上の方に置いてある物を取ろうとした時に、かっちゃんが椅子に飛びついてきたのだ。私はびっくりして、咄嗟にどこかに掴まろうとしたが、かっちゃんは私が予想していたような行動をしなかった。かっちゃんは私が椅子から落ちないように、椅子を押さえてくれたのだ。その瞬間、私は自分のことを情けなく思った。障害者というだけで、ひどい偏見を持ってしまっていたのだ。あの出来事から私の考え方は変わった。障害の有無関係なしに人には思いやりがあり、お互いに支え合うことが大切だと気付くことができた。

私が障害者のことを特別に思わなくなったのは、障害者のための支援施設「グループホーム」で働いている母も大きく関係している。母はよく家で、仕事場での話をしてくれる。知的障害があっても時間の長さがわからない人、精神疾患があっても感情に波があり中々働きにいけない人……。たくさん話を聞く中で、「障害＝できないこと」ではなく、その人の個性の一部であることに気がついた。これは私の価値観に過ぎないが、障害は悪いものではないと思う。私は、障害は物事の得意不得意と同じようなものを感じる。運動は得意だが、歌うことが苦手な人がいるように、かっちゃんは心が不安定だが、思いやりは人一倍ある。母の仕事場にいる知的障害者は勉強が苦手だが、母がその人から聞いた話はユーモアで溢れている。

だがやはり、障害者のことをよく思わない人は多い。かっちゃんが外で歩いているだけで「怪しい人がいる」「後ろからついてこられて怖い」といった、心ない言葉をコソコソ話している人をたくさん見かけた。SNSでも、障害者に対して冷たい言葉を投げかけている人がたくさんいた。そのような人たちを見て、私は悲しくなった。それと同時に、悔しい気持ちにもなった。その人たちは、以前私がかっちゃんのことを怖く思っていた時のように、障害について知らないだけなのだと思う。だから、少しでも多くの人に知ってほしい、そう思うようになった。

私は、障害者の人たちを特別扱いするべきでも、「かわいそう」といって線を引くべきでもないと思う。なぜなら、障害はその人の人間性や人生の全てではないからだ。障害はその人の個性の一部であり、お互いに認め合うべきものなのだ。だから、授業中に、自分が得意な分野であれば苦手な人に教え、自分が苦手な分野ならば得意な人に助けてもらう。この誰しものがやったことのある、何気ないやりとりを社会全体で行っていくべきだと考える。現代社会においてバリアフリーが広まり、スロープが取り付けられたり、点字ブロックが置かれたりして、生活していく上で不自由な人は減ってきているだろう。また、精神疾患や知的障害のある人のための住居や就労施設も建設され、以前より一段と生きやすくなっていると思う。だが、心の中はどうだろうか。偏見や差別、特別扱い、誹謗中傷などで傷だらけの人が多いはずだ。そのような人たちを少しでも減らすために、まずはみんなが“知る”ということが大切だと思う。障害について正しい知識を身につけ、考え、想像する。そして、思いやりの心を忘れずに行動する。そうすれば、社会はどんどん変わっていくだろう。障害の有無関係なしに、全員が過ごしやすい世の中になると思う。一人一人の思いやりの心が社会全体を変えていくのだ。

偏見や差別は、「知らない」ということから生まれる。また、いくら知識があったとしても、自分にその気がなかったとしても、相手の心を傷つけてしまう可能性は十分にある。これは、障害の有無や人種、性別なんて関係なしに、全員に言えることだ。だから、差別のない全員が自由に生きることができる共生社会を実現させることは、とても困難なことなのかもしれない。だが、一人一人が少し意識を変えるだけで、思いやりを持つだけで、心は温かくなるだろう。生きやすくなるだろう。私たちは生きている以上、いつ病気になっても、事故にあってもおかしくはない。そんな時、すぐに手を差し伸べられる環境を少しずつつくりていきたい。